

## 戦前の在米日本人移民コミュニティにおける横浜正金銀行の役割とそのアーカイブ・プロジェクト

佃 陽 子

### はじめに

現在の三菱 UFJ 銀行の前身にあたる、横浜正金銀行は 1880（明治 13）年に設立され、日本政府による出資と監督保護のもと、戦前には世界の三大外国為替銀行の一つに成長し、日本帝国の政治・経済・軍事の拡張に非常に大きな役割を果たした。欧米各国の主要都市や満洲、朝鮮などの日本の東アジア植民地に設けられた正金銀行の海外支店や出張所は日本の貿易と国際金融の発展に不可欠な存在であったが、アメリカ西海岸やハワイでは日米貿易だけでなく在米日本人移民の預金や郷里への送金に重要な役割を担った。地理学者の矢ヶ崎典隆によれば、1880 年のニューヨークに次いで 1886 年に開設されたサンフランシスコ出張所は、1885 年に始まった日本政府とハワイ王国の間の官約移民の送金を主な目的としていた<sup>1</sup>。日本人移民社会がハワイからアメリカ西海岸に広がっていくにつれ、1892 年にハワイ出張所が開設（1900 年に支店に昇格）され、1900 年に支店に昇格したサンフランシスコの分店が 1913 年にロサンゼルスに設けられ、1917 年にはシアトル出張所も開設された<sup>2</sup>。在米日本人移民の郷里への送金額は 1929 年ではアメリカ本土から 1500 万円にのぼり、ハワイを含めるとアメリカからの送金は海外からの送金総額の 4 分の 3 であったという<sup>3</sup>。また、正金銀行全体の普通預金において在米日本人移民の預金額は相当な割合を占めており、経済学者の山崎弘明の試算によれば、サンフランシスコ、ロサンゼルス、ハワイの三店

だけで定期預金総額は1億円近くあり、それは本店の定期預金額の6割以上、正金銀行全体の3割以上であったとされる<sup>4</sup>。

戦前に排斥の対象になった日本人移民がアメリカの銀行から融資を受けることは極めて困難だったが、外国為替銀行であった正金銀行も移民への貸付は限定的で、移民との主な関わりは預金と送金であったことから、正金銀行が戦前の在米日本人社会の金融に果たした役割は大きくなかったと矢ヶ崎は述べる<sup>5</sup>。日本人移民がアメリカで設立した日系銀行はどこも経営が不安定で破綻が多かったため、移民たちは同郷者の信頼関係にもとづく伝統的な頼母子講や、非制度的な信用貯蓄組合、ディーラークレジットによってしばしば事業資金を融通した<sup>6</sup>。1941年の日米開戦でアメリカにおける正金銀行の支店・出張所の資料はFBIがすべて接收した。戦後GHQによって正金銀行が解体され、後に東京銀行となつてからも、その資料の公開は極めて限定的であったことから、戦前、特に1930年代の正金銀行と在米日本人移民の関係についての研究は十分になされてこなかった<sup>7</sup>。

### 日米史料館・岡コレクションのデジタルアーカイブ・プロジェクト

本稿では、FBIによって接收された横浜正金銀行サンフランシスコ支店の史料を所蔵する日米史料館（Japanese American History Archives）岡コレクションのデジタルアーカイブ・プロジェクトについて紹介する。日米史料館・岡コレクションは現在、サンフランシスコ日本町にある非営利団体、北加日本文化コミュニティセンター（Japanese Cultural and Community Center of Northern California, 以下JCCCNC）によって管理されている。日米史料館は、1910年代に日本人移民の両親のもと、サンフランシスコで生まれ育った帰米二世の岡省三氏によって作られた。岡は12歳で両親とともに日本に行き、東京の大学で英語と法律を学び、卒業後に銀行員となった。戦後の1948年にアメリカに戻った岡は、1957年に当時の東京銀行サンフランシスコ支店に勤め始めた<sup>8</sup>。日米両方の

言語に堪能な婦米二世の岡は、1952年サンフランシスコ講和条約が公布された頃から、日本人移民に関する史料の収集を始めた。東京銀行サンフランシスコ支店は1975年にカリフォルニア第一銀行に改称されたが、銀行のプロジェクトとして1977年に日米史料室（Japanese American History Room）が設立された<sup>9</sup>。副頭取だった岡が1986年に銀行を退職すると、第一銀行は史料室の史料をすべてJCCCNCに寄付し、日米史料室は日米史料館に改称された。

日米史料館の所蔵資料には、1880年代半ばから1950年頃までの日本人移民社会を知るために残された数少ない貴重な史料が一万点以上ある。というも、日米開戦となり、その後西海岸に住むすべての日本人・日系人に対する強制退去・強制収容が行われた際に、多くの日本人は日本のスパイと疑われないように日本に関連する多くの資料を処分してしまっただからである。その史料には、戦前および強制収容所で一世が残した日記などの個人的な記録や、一世画家の小圃千浦やヒサコ・ヒビの絵画、サンフランシスコ講和会議の際に当時のディーン・アチソン米国国務長官が使用した机などが含まれている<sup>10</sup>。1988年の市民自由法の制定により、戦中の日系人強制収容に対する公式な謝罪と補償がアメリカ政府からなされた後、戦中にFBIが没収した横浜正金銀行の資料の多くが日米史料館に返還された。岡が2004年に他界した後、日米史料館の史料はJCCCNCが管理してきたが、現在の日系コミュニティを主導する三世・四世のほとんどは日本語が読めないこともあり、史料館は閉鎖され、史料の保存は適切といえない状態が長く続いた。

2019年、JCCCNCは日米史料館を正式に「日米史料館・岡コレクション」と改称し、資料の適切な保存に乗り出した<sup>11</sup>。JCCCNCはスタンフォード大学フーヴァー研究所ジャパニーズ・ディアスポラ・イニシアチブ（Japanese Diaspora Initiative, JDI）の上田薫氏と協力し、2022年にアメリカ国立公文書記録管理局（National Archives and Records Administration, NARA）の歴史的出版物・記録委員会（National Historic Publications and Records Committee）より助成金を得て、日米史料館の所

蔵する横浜正金銀行の史料を中心に、デジタルアーカイブを制作するプロジェクトを開始した<sup>12</sup>。筆者はこのプロジェクトにアカデミックアドバイザーとして関わっており、2022年にJCCCNCを訪問し、日米の研究者やサンフランシスコの日系コミュニティの人々とともに、岡コレクションの横浜正金銀行史料の整理を行っている。

### コミュニティと研究者の関係性

岡コレクションの本格的な史料整理はまだ始まったばかりだが、横浜正金銀行関連史料も含め、その中に多く含まれると思われる1930年代から日米開戦までの史料は、日系アメリカ人研究においては「空白の1930年代」を埋める貴重なものであると考えられる。日系アメリカ人についての研究は、アメリカでは1960年代に公民権運動の中で生まれたエスニック・スタディーズにおけるアジア系アメリカ研究として発展し、1924年の「排日移民法」をクライマックスとする日本人移民の排斥の歴史と、第二次世界大戦の経験に集中してきた。日本においては、移民の出身地に焦点をあてた出移民研究があった一方で、アメリカのエスニック・スタディーズを輸入する形で日系移民のアメリカ社会への定着と同化が研究されていくが、やはり1930年代についてははっきりと空白があった<sup>13</sup>。

1930年代の在米日本人移民社会を語ることが困難だったのは、戦争によって史料が処分されてしまっただけでなく、それが長らくタブーとされてきたからである<sup>14</sup>。1930年代は日本が東アジアへの植民地拡大と侵攻をすすめ、アメリカでも日本に対する批判が高まる中、在米日本人移民は難しい立場に立たされた。当時、白人ではないという理由でアメリカへの帰化を認められず、1924年以降アメリカへの移住を禁じられた在米日本人が公式に頼ることができるのは日本政府しかなかった。満洲事変や盧溝橋事件の後には多額の献金などの愛国的運動が在米日本人コミュニティの間で加熱したが<sup>15</sup>、一方で、アメリカ国籍を持つ二世の子

供たちが成長していく中、アメリカへの忠誠心もまた重要とされた<sup>16</sup>。1930年代の移民一世の日本への愛国主義は、戦中の強制収容に対する補償を求めた1970年代のリドレス運動にとって不利になると思われたことから、戦後、一世は沈黙し、1988年に補償と謝罪が成立するまでこれに関する研究の公表も控えられた<sup>17</sup>。日系アメリカ人史のパイオニアであるユウジ・イチオカも、自身の研究がリドレス反対派に政治利用されることを危惧し、1930年代の日系コミュニティおよび一世の忠誠心にかかわる研究の発表を控えていた<sup>18</sup>。1990年代以降、戦前の在米日本人コミュニティに関する研究が、日本語の史料を用いた日本の研究者によって数多く発表された一方で、アメリカの研究者による研究は二世以降に着目したものが多かった<sup>19</sup>。これはイチオカのように日本語に堪能なアメリカの研究者は例外的であり、アメリカの研究の大半は英語で書かれた資料のみにもとづいているためである。

すでに補償も実現し、政治的タブーもなくなった今日、JCCCNCが主導するアーカイブ・プロジェクトはどのような貢献を果たすことができるだろうか。ここで重要なのが、このプロジェクトの目指すところがコミュニティアーカイブであるという点である。JCCCNCはスタンフォード大学フーヴァー研究所の上田氏の支援を得ているものの、岡コレクションの貴重な史料を大学のアーカイブに寄贈するのではなく、コミュニティに開かれたものとして、コミュニティが管理していくことを目指している。日本人移民のアーカイブには、1960年代から日系市民協会(Japanese American Citizens League, JAACL)によって進められたカリフォルニア大学ロサンゼルス校の日系アメリカ人研究プロジェクト(Japanese American Research Project, 以下 JARP)をはじめ、西海岸やハワイの大学で多くのアーカイブがある<sup>20</sup>。こうした大学のアーカイブは貴重な史料を安定的に保存できる反面、自然と研究者のような専門家などにアクセスが限られ、結果として、三世や四世などの後世代を含むコミュニティの人々が、自分たちの祖先に関する史料にアクセスしにくくなってしまふ。JCCCNCは研究者だけではなく、コミュニティとつながり、コミュ

ニティに還元するためのアーカイブを目指している。

日系アメリカ人研究や移民研究に限らず、研究者が利用する史料の多くはコミュニティから生み出されたものである。研究者はどのようにしてコミュニティに貢献することができるだろうか。筆者は2000年代はじめにサンフランシスコ州立大学大学院のエスニック・スタディーズに留学して以来、サンフランシスコ日本町の日系・日本人コミュニティに深くかかわり、参与観察を通して、日本町の保存運動や、戦前の移民子孫と戦後の新移民との関係などに関する研究を行ってきた。サンフランシスコ州立大学は、学生たちによる第三世界ストライキによって1969年にアメリカではじめてエスニック・スタディーズの講座を創設した。その後エスニック・スタディーズは新しい学問分野としてアメリカ全土に広がって発展をとげたが、そのはじまりにおいては、人種的マイノリティが自らのルーツについて主体的に学び、研究するだけでなく、自らのコミュニティへ奉仕し、発展させることを目的としていた<sup>21</sup>。筆者は修士課程修了後、日本に帰国し日本を拠点とするようになったが、JCCNCのプロジェクトは筆者が専門家としてコミュニティに「帰り」、「恩返し」をする機会でもある。

日系アメリカ人三世以降の大半が英語モノリンガルである現在、日本語の史料を読むことのできる日本の移民研究者は、日米間の物理的距離はあっても、現地の日系コミュニティに貢献できることは少なくない。しかし、かつてユウジ・イチオカは、日本から調査にやってくる日本人研究者の中には、現地コミュニティの貴重な日本語史料を日本に持ち帰ってしまう者がおり、時に私蔵することで外部から史料にアクセスできなくなってしまうことを厳しく批判した<sup>22</sup>。JARPコレクションの拡充にも尽力し、一世に関する史料を収集していたイチオカは、「一世は米国内で歴史を作ったのであり、その歴史の記録は我々 [アメリカ人] の歴史遺産の一部としてアメリカに残るべきものだ」と述べ、すべての研究者が平等に史料にアクセスできるように公的な機関に所蔵すべきだと主張する<sup>23</sup>。「日本人海外移民が近代日本史の不可分の側面であり海

外日本人移民の社会を日本社会の延長だとみなす」日本人移民研究者に対して、在米日本人移民一世の歴史をアメリカの歴史の一部としてみなすアメリカの移民研究者との間には、埋めがたい考え方の溝があるとイチオカは指摘する<sup>24</sup>。公民権運動を経験し、エスニック・スタディーズおよびアジア系アメリカ人研究の創設に貢献したパイオニアとして、イチオカがこうした立場をとるのは当然であろう。だが、日本人移民とその子孫の歴史を送り出した側の日本の歴史の一部とみなすのか、あるいは受け入れ国の歴史の一部とみなすのかという、国民国家の歴史をめぐる対立は、近年の歴史に対するトランスナショナルなアプローチ、あるいはグローバルヒストリーの発展が一つの答えとなるであろうし、日本と受入国における研究者間が対話を続けることも重要である<sup>25</sup>。

一世に関する史料を物理的にどこでどうやって保存すべきなのかという課題は、デジタルアーカイブというテクノロジーの発展が一つの回答になる。インターネットを通じて、世界のどこにいてもアクセス可能なデジタルアーカイブは、研究者のみならずコミュニティの多くの人に開かれたものにすることができる。フーヴァー研究所のジャパニーズ・ディアスポラ・イニシアチブによる邦字新聞デジタルコレクションはアメリカだけでなく、南米や日本の旧植民地を含む世界各地で発行された戦前の日本語新聞を収集、デジタル化し、キーワード検索も可能なデジタルアーカイブを公開している<sup>26</sup>。岡コレクションのデジタルアーカイブ・プロジェクトは、日米の研究者が現地コミュニティと協力して、貴重な史料をデジタル化することによって、史料の長期的な保存を安定化し、すべての人が平等にアクセスできるリソースを提供し、これまで空白だった1930年代の在米日本人コミュニティと横浜正金銀行の役割についての研究の前進に寄与するものである。

## おわりに

JCCCNCによる日米史料館・岡コレクションのデジタルアーカイブ・

プロジェクトは、国や言語を越えた日米の研究者の協力、研究者と現地コミュニティの連携、デジタル化による史料の長期保存とアクセシビリティの向上といった点で、従来の様々な課題に解決策を与えるものである。しかし、このプロジェクトはまだ始まったばかりで、史料の整理から分析を経ての研究成果の発表までには、時間も労力も必要とされる<sup>27</sup>。また、これから史料を発掘するにあたって直面する課題もあるだろう。たとえば、かつて補償運動への政治的影響を危惧した「1930年代のタブー」があったように、発掘された歴史的事実が研究者にとっては学術的に価値のあるものであったとしても、現在のコミュニティにとって喜ばしい発見であるとは限らないかもしれない。第二次大戦中における忠誠心の問題をめぐるコミュニティの分断は、現代の日系アメリカ人コミュニティにも少なからず影を落としており、1930年代の在米日本人の日本に対する愛国運動をどのように解釈するかには注意が必要とされる<sup>28</sup>。今後、アーカイブを利用する研究者がどのようにしてその研究成果をコミュニティに還元するのか、どの言語で、どのようにして発表するのかも問われなければならないだろう。

また、このプロジェクトがアメリカのナショナル・アーカイブスから助成金を得ていることから、戦前の在米日本人移民の歴史はあくまでアメリカの「エスニック・コミュニティの歴史」として位置づけられており、国家的な歴史観が前提とされている。逆に、日本で助成金を申請する場合には、在外日系コミュニティは日本の歴史の一部として位置づけられることになるだろう。こうした一国史的な歴史観をどのように乗り越えることができるのか、トランスナショナルな視点から移民コミュニティのアーカイブのあり方を考える必要がある。

本稿は、成城大学特別研究助成「サンフランシスコの岡省三コレクションの発掘とコミュニティ・アーカイブについての研究」(2022-2023年度)の研究成果である。

注

- 1 矢ヶ崎典隆「カリフォルニアの日本人移民社会における金融の諸問題」『横浜国立大学人文紀要第一類、哲学・社会科学』34号（1988年）、101-121頁。
- 2 東京銀行編『横浜正金銀行全史 第6巻』東京銀行、1984年。
- 3 送金自体は正金銀行を通さなくても、外国郵便為替やアメリカの銀行からも可能だった。矢ヶ崎、102頁。
- 4 山崎弘明「『金解禁期』の横浜正金銀行—資産・負債構成と内部的信用ネットワーク—」山口和雄・加藤俊彦編『両大戦間の横浜正金銀行』日本経営史研究所、1988年、57-144頁、特に81頁。
- 5 矢ヶ崎、118頁。
- 6 Ibid., 119頁。
- 7 後述する岡省三氏が日米史料館を運営していた時期に、1920-40年代頃の横浜正金銀行サンフランシスコ支店資料を利用した研究として、高嶋雅明「戦前期カリフォルニアにおける横浜正金銀行と日系社会—1900～1935—」『大阪大学経済学』42巻、3・4号（1993年）、204-222がある。高嶋の調査時には正金関連の資料は未整理であったと思われる。
- 8 Japanese American History Archives (JAHA), JCCNC, <https://www.jccnc.org/about/japanese-american-history-archives-jaha/> (2023年1月9日閲覧)
- 9 東京銀行サンフランシスコ支店は1975年にカリフォルニア第一銀行 (California First Bank) に改称し、現在はユニオン銀行 (Union Bank) となっている。
- 10 JAHA, JCCNC.
- 11 JCCNC, *Quarterly Newsletter* 62, Winter 2019, 3-5. [https://www.jccnc.org/wp-content/uploads/2020/01/web-files\\_FINAL-FOR-WEBSITE.pdf](https://www.jccnc.org/wp-content/uploads/2020/01/web-files_FINAL-FOR-WEBSITE.pdf) (2023年1月9日閲覧)
- 12 JCCNC, *Quarterly Newsletter* 72, Winter 2022, 22-23. <https://www.jccnc.org/wp-content/uploads/2022/10/Winter-2022.pdf> (2023年1月9日閲覧)
- 13 日本とアメリカにおける日系アメリカ人研究の発展およびその歴史叙述については、拙稿「ハワイにおける現代の日本人移住者の移動性と「移民性」」『教養論集』25 (2015年)、41-85頁、特に44-46頁を参照。
- 14 阪田安雄「戦後50年と日系アメリカ人史研究—語られない1930年代」『移民研究年報』1 (1995年)、3-42頁。
- 15 ユウジ・イチオカ「日本人移民のナショナリズム—一世と日中戦争1937-1941」『抑留まで：戦間期の在米日系人』ユウジ・イチオカ著、彩流社、2013年、171-188頁。東栄一郎『日系アメリカ移民 二つの帝国のはざままで：忘れられた記憶1868-1945』（飯野正子監訳）第7章、明石書店、2014年。
- 16 坂口満宏『日本人アメリカ移民史』2001年、不二出版、31-36頁。
- 17 Ibid., 18-19頁；阪田「戦後50年と日系アメリカ人史研究」。
- 18 東栄一郎「編集者の序 市岡雄二と日系アメリカ人史研究の新しいパラダイム」イチオカ『抑留まで』、23頁。この問題に関する議論は、拙稿「越境する日系人の表象—『二つの祖国』と『山河燃ゆ』をめぐる日米での論争から」成城大学法学会編『変動する社会と法・政治・文化—成城学園創立100周年記念・成城大学法学部創設40周年記念』（信山社、2019年、321-352頁）、特に348-349頁を参照。

- 19 移民研究会編『日本の移民研究 動向と文献目録Ⅱ 1992年10月-2005年9月』明石書店, 2008年, 59-60頁。
- 20 JACLがすすめたJARPと、戦後における日系アメリカ人の歴史叙述の構築については、南川文里『「日系アメリカ人」歴史社会学：エスニシティ、人種、ナショナルリズム』彩流社, 2007年, 第7章を参照。
- 21 Our History, San Francisco State University, College of Ethnic Studies, <https://ethnicstudies.sfsu.edu/history> (2023年1月11日閲覧)
- 22 ユウジ・イチオカ「成り行きの歴史家」『抑留まで』247-263頁, 特に256-259頁。この論考の初出をサンフランシスコに留学したばかりの2000年に読んだ筆者はひどく衝撃を受けたのをよく覚えている。初出は、Yuji Ichioka, “A Historian by Happenstance,” *Amerasia Journal* vol. 26, no. 1 (2000), 32-53. イチオカ氏は2002年に急逝し、筆者がお会いすることはなかった。
- 23 イチオカ「成り行きの歴史家」, 257-258頁。
- 24 *Ibid.*, 259頁。
- 25 日米の移民研究者間の対話の試みとして、Yasuko Takezawa and Gary Okihiro, eds., *Transpacific Japanese American Studies: Conversations on Race and Racializations* (Honolulu: University of Hawai'i Press, 2016)がある。移民の歴史を日米どちらの歴史としてみなすかについては、同書に収録されている、拙稿 Yoko Tsukuda, “Location, Positionality, and Community: Studying and Teaching Japanese America in the U.S. and Japan,” 389-92も参照。日本人移民のトランスナショナルヒストリーについては、2000年代以降数多く出版されているが、代表的なものとして、イチオカの指導を受けた一人でもある東栄一郎の著作がある。東『日系アメリカ移民 二つの帝国のはざままで』(原著は Eiichiro Azuma, *Between Two Empires: Race, History, and Transnationalism in Japanese America*, Oxford: Oxford University Press, 2005); 東栄一郎『帝国のフロンティアをもとめて：日本人の環太平洋移動と入植者植民地主義』(飯島真里子ほか訳)名古屋大学出版会、2022年(原著は、Eiichiro Azuma, *In Search of Our Frontier: Japanese America and Settler Colonialism in the Construction of Japan's Borderless Empire*, Berkeley: University of California Press, 2019)。
- 26 Hoji Shinbun Digital Collection, Japanese Diaspora Initiative, Hoover Institution Library & Archives, Stanford University, <https://hojishinbun.hoover.org/> (2023年1月12日閲覧)
- 27 現在、筆者の授業を履修している成城大学の学生の協力のもと、史料の分析を進めており、来年度以降にその成果を発表する予定である。
- 28 補償運動における日系人の忠誠心をめぐる問題については、拙稿「越境する日系人の表象」および「小説『二つの祖国』をめぐる虚実とプロパガンダ」『教養論集』30(2022年), 85-114頁でも論じている。